J-STAGE NEWS：J-STAGEニュース No.30

電子ジャーナルの最新情報をおとどけするJ-STAGE機関紙

No.30　2012年1月1日

ISSN 1346-1990

2012年1月1日発行

独立行政法人
科学技術振興機構

今号の記事：

●広がる J-STAGE 連携
●J-STAGE3 全文 XML 登載パイロットプロジェクト活動中
●Journal@rchive＆e ジャーナル セミナー（大阪開催せまる！）
●CrossRef 総会参加報告
●新年のご挨拶
●シリーズ学会訪問 ～J-STAGE 利用学協会様の声～[東北ジャーナル刊行会様]
●J-STAGE/Journal@rchive 展示・発表報告
●お詫びと訂正

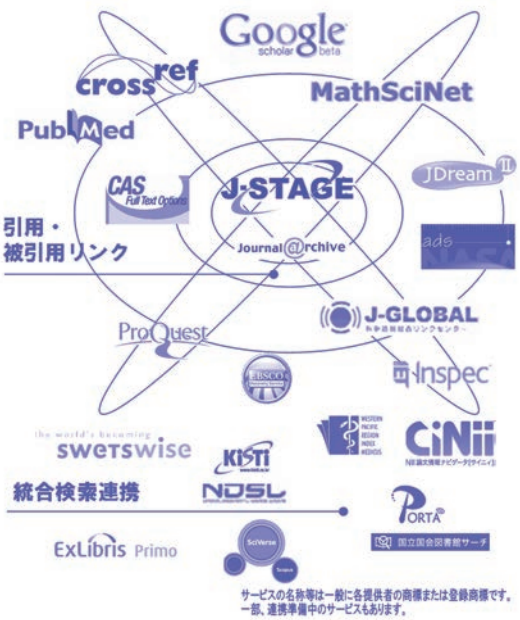
広がる J-STAGE 連携

世界中の検索・データベースサービスから、探せる、見つかる J-STAGE コンテンツ

J-STAGE では、登載論文が世界中のより多くの研究者のお役に立てるよう、世界的に著名な検索エンジンや、抄録データベース等との連携を積極的に行っています（連携にあたっての交渉や費用負担等は原則として JST が行っております）。

平成 23 年の新しい連携先は、次のとおりです。

- NDSL（韓国科学技術情報研究院）
- Scopus（Elsevier）
- Swetswise Online Content（Swets）
- INSPEC（IET）
- WPRIM（WHO 西太平洋地域事務局）
- 国立国会図書館サーチ（PORTA 後継サービス）
- Summon/CSA Illustrata（ProQuest）
- EBSCO Discovery Service（EBSCO）
- Primo Central（ExLibris）



JST では、今後もさらに多くの関係先との連携実現に向け努力してまいります。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

J-STAGE3 全文 XML 登載パイロットプロジェクト活動中

検討経過や結果等 J-STAGE サイト等で順次公開予定

これまでも本紙などでお伝えしておりますとおり、本年春にリリースされる J-STAGE 新システム（J-STAGE3）では、全文情報の国際標準 XML 形式(JATS)での登載が可能となります。JST では、リリース当初から全文 XML 形式でのデータ登載を希望されている学協会様とともに「全文 XML 登載パイロットプロジェクト」を立ち上げ、現在活動中です。J-STAGE 全利用誌のうち、応募・選定を経た 13 誌において、実際に XML 形式で論文全文情報を作成いただき、開発作業と並行してデータ検証を進める中で、わが国の学会論文誌刊行プロセスの実情に即した、より実践的な全文 XML データ作成運用のありかたを検討しております。なお、検討経過や結果等は J-STAGE サイト等で順次公開していく予定です。

Journal@rchive & e ジャーナルセミナー（大阪開催せまる!）

―論文誌電子公開の新たなステージと学協会の社会的役割を考える―

JST では、国内の学協会様を対象とした「Journal@rchive & e ジャーナルセミナー2012」を 2 月 7 日、大阪で開催いたします（東京会場の受付は終了いたしました。ご協力まことにありがとうございました）。皆様のご参加をお待ちしております。内容など詳細は J-STAGE サイト http://info.jstage.jst.go.jp/society/meeting/ をご覧ください。

CrossRef 総会参加報告

JST から参加したスタッフの報告を掲載いたします

2011 年 11 月 14～15 日に米国ケンブリッジで開催された CrossRef の WORK SHOP と年次総会に参加した。定例の報告では CrossRef が付与した DOI が五千万件を超えたことが報告された。約二万六千のジャーナル、約二万二千の予稿集の記事にDOIが付与されており、最近CrossRefが力を入れている書籍にも二十万件規模で付与されている。また、8月にプレスリリースされたDOI表示ガイドラインについてもプレゼンが行われた。これまで doi:の後ろに DOI が記載されることが多かったが、URL を記載するようになった。論文剽窃検知システムである CrossCheck には約六万の書籍やジャーナル等が登録されており、普及が進んでいることがうかがわれた。

今年のテーマの一つは、論文の取り下げであった。今年正式リリースが予定されている CrossRef の新サービスである CrossMark はこのような論文の取り下げや訂正などが行われた場合に、その履歴を閲覧者が確認できる機能である。WORKSHOPにおいて機能紹介が行われた。また、年次総会ではMendeley等の論文管理ソフトで研究者が論文を個々のフォルダに入れて引用することがあるが、そのためその記事が取り下げられた後も引用されてしまう事例が発生しているとの問題提起の講演もあった。また、中国の英文誌出版者による国内の学術誌状況についての紹介や、論文剽窃に関する出版者アンケートを行った中国人研究者の発表も行われた。講演後に話を聞くと日本の学協会からも多く回答があり感謝しているとのことであった。恒例の著名な講演者（今年は、Cheap という本を書いた研究者）による講演や、電子付録や ORCID 等に関する発表も行われ、活発な意見交換が行われた。

新年のご挨拶

JST 電子ジャーナル担当一同より新年のご挨拶をもうしあげます。

◆新年あけましておめでとうございます。J-STAGE も早 13 年目を迎え、いよいよ本年４月より装いも新たに、より使いやすく、さらに機能的な電子ジャーナルプラットフォーム“J-STAGE3”がデビューします。また、オールジャパンのためのリンクセンターとして“ジャパンリンクセンター（JaLC）”も同時にスタートし、世界で９番目の DOI 付与機関（Registration Agency）となる予定です。J-STAGE と JaLC で日本の学術界のさらなる活性化を図ってまいります。今後とも皆様方のより一層のお引き立てをよろしくお願い申し上げます。（宮川：電子ジャーナル担当調査役）

◆毎度御世話になっております。J-STAGE3の４月のリリースに向けて全力で取り組んでいます。新しい年になり、気分を新たにし、皆様のお役に立てるシステムになるよう一層努力いたします。また新しい試みも始めたいと思っています。ご協力の程お願い申し上げます。（久保田：J-STAGE担当）

◆「つらいときも笑顔で」をモットーにジャパンリンクセンターの立ち上げに取り組んでいます。できているでしょうか？（加藤（斉）：JaLC担当）

土屋、宮川、佐藤、加藤、青山

◆円滑な業務実施と（太る方の）ダイエットをがんばります！（佐藤：J- STAGE担当）

◆寒くなりましたね。アーカイブ/J-STAGE担当からJaLC担当に移籍（つま先が残っていますが）して3ヶ月が過ぎました。JaLCもJ-STAGE3もリリース間近ですが、更に便利で使いやすいシステムを目指して参ります。どうぞよろしくお願いいたします。（土屋：JaLC／アーカイブ担当）

◆海外出展の会場で、「あなたたちは勇気と誇りある国の方々ですね」と、参加者の方からお見舞いの言葉とともに握手を求められたのが、昨年印象に残ったできごとでした。学協会の皆様とともに育ち、生まれ変わるJ-STAGEが、復興と再生をめざすこの国と、そして世界の人々に役立つような新生の年となればと思っております。（青山：J-STAGE担当）

◆私はJ-STAGE3の要件定義から参画しております。参画当時、「だれでも、いつでも、どこでも、簡単に利用できるシステムを実現するように頑張ります。」とご挨拶申し上げました。2012年4月の本稼働に向けて、はちまきを締め直して、頑張ってまいります。2011年は大変な年でしたが、2012年は良い年でありますように。（斉藤：システム基盤担当）

◆お世話になっております。J-STAGE の本格デビューに当たり、今後は、より多くの人文・社会系ジャーナルの皆様にも加入頂き、ご利用頂けるよう努力して行きたいと思います。（高橋：J-STAGE 学会／展示担当）

◆私事ですが、当号が発行される頃に30歳を迎えます。よく30歳の誕生日は人生の縮図と言われます。その日何しようと少し焦りつつ、きっと普段通り仕事をしている気がします。これからも「つくる」、「つながる」をコンセプトに皆さまの情報発信をお手伝いできるよう頑張ります。（吉田：アーカイブ／リンク運用担当）

◆龍が天に昇るが如く、2012 年 J-STAGE が世界を駆けめぐる。（小倉：J-STAGE 学会／プロモーション担当）

〔シリーズ学会訪問〕～J-STAGE 利用学協会様の声～

［東北ジャーナル刊行会様］

今回は、東北ジャーナル刊行会様を訪問させていただきました。東北ジャーナル刊行会様は、その前身が大正9年に発足された由緒ある刊行会であり、J-STAGE には 2004 年からご参画いただいております。J-STAGE では、英文誌「The Tohoku Journal of Experimental Medicine」が Vol.178 から Vol.225 まで、Journal@rchive では創刊号から Vol.177 まで公開されています。The Tohoku Journal of Experimental Medicine(TJEM)、編集委員長である東北大学大学院医学系研究科・教授の柴原茂樹先生にお話しを伺いました。なお、柴原先生は現在、医学科長であり、東北大学附属図書館医学分館長も担当されています。

－柴原先生のご経歴と編集委員長としてのお立場(任務)について

2003 年より TJEM 誌の編集委員長をしています。編集委員長としての任務は、投稿論文を迅速かつ的確に審査し、査読者の意見に基づき改訂された論文を、できるだけ早く掲載（公開）することに尽きます。英語を母国語としない著者が大部分ですので、より明解な表現に修正することも重要な仕事です。「著者のために」を信条に、編集部全員が努力しています。

編集委員長　柴原先生と後左側から、編集部の石垣様、奥山様、東様

－東北ジャーナル刊行会についてご紹介ください。

TJEM 誌の刊行母体である『東北ジャーナル刊行会』は、昭和 56 年(1981 年)に設立され、これまで支障無く刊行を継続しています。1920 年の創刊以来、終戦直後の 1946 年（昭和 21 年）を除き、刊行され続けてきた事実は驚嘆に値します。歴代の編集長の先生方の情熱に心を打たれます。

他の学会誌と異なり、TJEM 誌は何の学会にも属していません。そこで、編集委員長に就任した直後より、海外からの投稿を増やすために、ホームページから日本語を一掃し、可能な限りの編集情報を公開するようにしました。さらに、編集委員長の写真と履歴等を掲載することにより、誰でも容易に TJEM 誌の責任者が特定できる（まさに顔が見える）ようにしました。その結果、2003 年には、海外からの投稿数が倍増しました。

－貴学会誌の電子ジャーナル化への取組みとJ-STAGEをご利用になるきっかけ(動機)は何でしょうか。

海外からの投稿を増やすために、編集委員長に就任した直後から、電子ジャーナル化を進めたいと考えていました。幸運にも、情報関連に詳しい学内の教授から J-STAGE の存在を教えて頂きました。

－J-STAGEの機能はいかがでしょうか。また、情報の国際発信力強化に役立ってきたでしょうか。

国際発信力強化に非常に役立っています。2004 年以降、さらに投稿論文数が増加し、最近では年間約 500 編で推移しています（2010 年には 589 編）。利用者（投稿者と査読者）にとって使い易いことが重要です。

－アーカイブについてはいかがでしょう。何か効果等ありましたでしょうか。

名誉なことに、TJEM 誌は最初の選考の時に採択されました。アーカイブは非常に効果的であったと思います。例えば、古い原著論文の中に、最近、引用回数が増えた論文が多数あります。

－今回、大震災を経験されて、J-STAGEへのご要望などありましたら、お聞かせください。

関東大震災、第2次世界大戦に次ぐ刊行危機かと心配しましたが、J-STAGE のおかげで杞憂に終わりました。事実、契約している印刷会社が被災し、印刷機械の損傷と紙不足のため、冊子体の刊行は約1ヶ月遅れましたが、電子版の作成には大きな支障はありませんでした。電子ジャーナルは災害時に頼りになると実感しました。懸念されている関東大震災を想定し、J-STAGE の機能のバックアップ体制を整備して頂きたいと思います。

－日本の学協会の課題・問題点、今後の学会誌の電子ジャーナル出版のあるべき方向性についてお考えをお願いします。

オープンアクセス化を進めるべきです。また、医学分館長の立場としては、毎年、値上げをする大手出版社の独占体制、あるいはそのような“横暴”がまかり通る構図を打破したいと思います。一方、震災を機に、災害科学（古地震学などを含む）も対象とするように、TJEM 誌の編集方針を改訂しました。今回の津波は、869 年の貞観津波の再来と考えられており、このように実証困難な、伝承に近い史実であっても、周知すべきであると痛感しました。世界中の地震多発地域の研究者と情報を共有することが、重要だと思います。今後、災害科学の分野においても、TJEM 誌が世界中の研究者が自由に投稿できるフォーラムとして貢献できればと願っています。

J-STAGE/Journal@rchive 展示・発表報告

2011年10月～12月のプロモーション活動

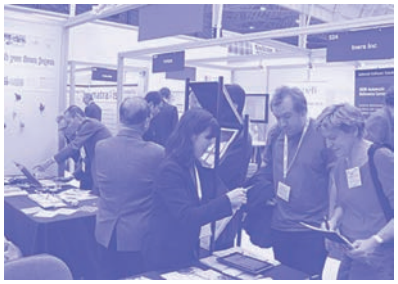
JSTでは、2011年度下期も内外において各分野の研究者や図書館関係者の皆様などにむけたJ-STAGEのプロモーションを実施しています。担当スタッフからそれらの様子についてご報告いたします。

1. インフォプロ2011（東京（日本科学未来館）、10月27～28日）

今回のINFOPRO2011では、J-STAGEの展示説明に加え、次期J-STAGE（J-STAGE3）及び次期リンクセンター（JaLC）の特徴や開発状況に関する発表を行い、次期システムに関するPRを行った。J-STAGE3の開発状況に関する発表では、平成22年度末に実施した国内学協会誌の電子化状況について、言語別、分野別等の電子化率に関する報告も行った。また、今回のINFOPROでは、情報関連の各種セッションの他に、川口淳一郎氏による「はやぶさ」の打ち上げから帰還までの様々なエピソードや教訓等に関する特別講演もあり、盛況の裡に終了した。

2. 図書館総合展（横浜、11月9～11日）

現在のJSTリンクセンター（JLC）に替わり、来年度から運用開始のJapan Link Center（JaLC）と、同じく来年度から大幅なバージョンアップと共に装いも新たに生まれ替わる新生J-STAGEの紹介を中心に、JSTが提供する他の情報サービスと共同で展示を行った。 JaLCのスタートとあいまって、J-STAGEがより機能的で使いよい電子ジャーナルのプラットフォームとなることに期待する声も聞かれた。



3. Online Information 2011（ロンドン、11月29日～12月1日）

本年の展示には、118社が参加。JSTでは2009年にも参加をしたが、その当時ブースを訪れた人でJ-STAGEを知る人はほとんどいなかった。一方今回では、「J-STAGEを知っていますか」という質問に対し「知っている」「使っている」あるいは「大学図書館のホームページからリンクを貼っている」などの反応がみられ、継続的なプロモーションの必要性が強く感じられた。中には、2年前に同会場で配布したJournal@rchiveのボールペンをいまだに大切に使っているという研究者もいた。

4. ファインケミカルズ合成触媒国際会議2011（奈良、12月5～8日）

2011年化学年の一環として奈良で開催された国際会議でJ-STAGEとJournal@rchiveのプロモーションを行った。参加者は16ヶ国から約380名であった。「J-STAGEを知っているか？」との質問に対しては、日本人の参加者の多くは「知っている」「使っている」との返事であったが、外国からの参加者からはまだ「知らない」との反応も多く、特定の分野に焦点を絞ったプロモーションについても充実させる必要性を感じた。

5. 日本分子生物学会大会（横浜、2011年12月13～16日）

JSTの情報サービス（J-GLOBALやReaD & Researchmap等）と共に、J-STAGEとJournal@rchiveの展示・デモを行った。ブースを訪れたある女子高校生から、「J-STAGEは、PubMedとリンクされているのか？」という質問を受け、予期せぬ質問にスタッフは、大変驚き、また大いに感心をしたとの報告があった。J-STAGEは、研究者はもちろんであるが、院生や学部学生だけでなく、高校生や一般の方々にも存分にご利用いただきたいところである。

【お詫びと訂正】

J-STAGE News No.29でご報告もうしあげました「IUPAC2011におけるJ-STAGE展示報告」のなかで、展示を行った雑誌リストに誤りがございました。日本生物工学会様のJournal of Bioscience and Bioengineeringが学会名と共にリスト漏れとなっておりました。従いまして、IUPAC2011で展示を行いましたのは、日本生物工学会様を含め、9学会様の11誌であったことを改めてご報告させていただきます。リストに不備がございましたこと、ここに深くお詫びを申し上げ、訂正をさせていただきます。

編集後記

♪昨年の地震や台風の傷も癒えていない日本ですが、今年は、さらにヨーロッパの債務危機も予断を許さない状況になっています。ヨーロッパの景気の落ち込みや銀行の不振が日本の輸出や株価の落ち込みを招き我々庶民の暮らしにも陰を落としつつあるように思います。 J-STAGEは、公開雑誌タイトル数が800誌に迫り、経済学をはじめ人文社会科学系の雑誌も増えています。更にJ-STAGEのアーカイブサイトであるJournal@rchiveでも、経済学関係の雑誌を公開しています。 今日の我々と同じような懸念を以て、古今の学者が書いたであろう論文を検索しています。（淳）

J-STAGEニュース No. 30 2012年1月1日

編集：独立行政法人 科学技術振興機構（JST）
イノベーション推進本部 知識基盤情報部 電子ジャーナル担当
発行人 知識基盤情報部長 大倉 克美
〒102-0081 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ
電話 03-5214-8837（ダイヤルイン）
E-MAIL contact@jstage.jst.go.jp

J-STAGE http://www.jstage.jst.go.jp/

J-STAGEおよびJ-STAGEニュースに関するご意見・ご質問をお待ちしております。
JST知識基盤情報部 電子ジャーナル担当（contact@jstage.jst.go.jp）